# メタ表象から読み解く『ライ麦畑でつかまえて』

## Reading *The Catcher in the Rye* in Terms of Metarepresentation

持　留　浩　二

〔抄　録〕

本論文は、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』を「メタ表象」の観点から解釈したものである。まずメタ表象について簡単に説明し、その後『ライ麦畑』における様々な現象をメタ表象の観点から解釈し、さらにはこの小説の最大の問題とも言える、ホールデンは捕える側なのか捕えられている側なのかという問題にも一つの答えを提示している。メタ表象を処理する能力は生得的なものであるが、『ライ麦畑』の主人公ホールデンはその機能に欠陥があるように思われる。それゆえ彼は自分の気持ちと現実のありようを簡単に混同してしまう。「私は願っている（信じている）」というソースタグが外れてしまい、メタ表象が表象化されてしまうのだ。彼が物語の中で何度も期待と失意との間を往復するのはそのためである。ソースタグが外れ、現実に直面し、落胆し、再びソースタグが復活するのである。

**キーワード**　メタ表象、ライ麦畑でつかまえて、ソースタグ

### 序

2010年１月末、サリンジャー（J. D. Salinger）はその生涯を終えた。享年91であった。若者の成長や苦悩を描いたこの現代アメリカ作家が残した作品の中でも一番有名な作品が『ライ麦畑でつかまえて』（*The Catcher in the Rye*）である。この小説は1951年に出版されると、一時は熱狂的に若者に受け入れられた。その後も今に至るまでロングセラーであり続け、思春期の読者を獲得し続けている。

この作品は少年が大人になり成熟していくプロセスをリアルに描いている。サリンジャーの作品は、若者にとってのバイブルと言えるだろうが、成熟した大人にとってどれだけ意味を持つのか私はずっと疑問に思ってきた。もっと言うと、この作品は大人になると卒業すべき本ではないかと考えてきたのだ。

実際私自身すでにこの小説から卒業してしまっている。ただ、かつてこの小説に感銘を受け

た時に感じたいくつかの疑問が依然解決されぬまま残されている。その一つは、果たしてこの作品の主人公ホールデン・コールフィールドは無垢な子供たちを捕える側なのか、それとも子供たちと同じ捕えられる側なのかという疑問である。

この小説のタイトルにもなっている「ライ麦畑の捕え人」に関するエピソードは小説の後半に出てくる。妹のフィービーから将来何になりたいのかと問い詰められたホールデンは、ライ麦畑の捕え人になりたいと答える。ライ麦畑に象徴される無垢な世界の中で子供たちを守り続けるのがライ麦畑の捕え人だ。しかし私には、ホールデンは、実は守る側ではなく、守ってもらいたい、つまりライ麦畑の無垢な世界に捕えられていたいのではないかと思えた。

しかしそれは完全なパラドックスだ。一方で無垢な子供たちを捕えようとし、他方で捕えられようとするのは理屈に合わない。人は同時に捕える側と捕えられる側になることなどできない。これは長い間私にとって説明のつかない問題であったのだが、認知科学の「メタ表象」（“Metarepresentation”）という概念を知った時、その概念を使えば説明がつくのではと考えた。

本論文では、メタ表象という概念を使ってこのパラドキシカルな状況を説明したい。『ライ麦畑』においてホールデンが経験する様々な精神状況の変化にメタ表象がどう関係しているのか、ホールデンの頭の中で何が起こっているのかを解明したい。

## I

メタ表象という用語はアラン・レスリー（Alan Leslie）によって初めて導入された。レスリーはゼノン・ピリシン（Zenon Pylyshyn）からこの用語を借用した。簡単に言うと、メタ表象とは、表象の表象である。

では表象とは何かというと、表象とは、脳の外にある何か、あるいはある種の概念を脳の中で再現することである（例：太陽が照っている）。

メタ表象とは、表象の表象であり、二つの部分からなる。一つ目は表象のソースであり（例：私は～と思う、私の母が～だと言った）、もう一つは表象内容である（例：傘は必要ないだろうと）。つまりメタ表象は、ソースを特定するソースタグと表象内容から構成される（例：私の母は傘は必要ないだろうと言った）。そもそもメタ表象という概念は「心の理論」という考えとの関係でクローズアップされたものである。

1878年、アメリカの動物心理学者デイヴィッド・プレマック（David Premack）とガイ・ウッドラフ（Guy Woodruff）は「チンパンジーは心の理論を持っているか」（“Does the Chimpanzee Have a ‘Theory of Mind’?”）という論文の中で、チンパンジーなど霊長類の動物が、同種の仲間や他の種の動物が感じ考えている内容を推測しているかのような行動をとることに注目し、それは「心の理論」（“Theory of Mind”）という機能が働いているからでは

ないかと指摘した。同種の仲間であれ、他種の動物であれ、他者の行動に心の状態を帰属させることが心の理論の機能である。

レスリーは「心の理論メカニズム」（“Theory of Mind Mechanism”）という、行動からすべての心の状態を解釈するためのシステムを提唱している。メタ表象と心の理論の関係についてレスリーは、『他人の心を理解する――自閉症の観点から――』（*Understanding Other Minds: Perspectives from Autism*）に収められている「自閉症がメタ表象について教えてくれること」（“What Autism Teaches Us About Metarepresentation”）の中で「我々は、メタ表象の処理能力は、“ToMM” と呼ばれる、より大きな情報処理システム様式の下位構造であると考えている(88)」と言っている。

メタ表象は、ソースタグと表象内容から成るのだが、ソースタグをつけることにより、我々はある種の情報を「考慮中」のもとにストックすることができる。例えば、「多くの科学者は地球環境が悪化していると考えている」というメタ表象は、「多くの科学者が考えている」というソースタグと「地球環境が悪化している」という表象内容から成っているのだが、このメタ表象からは、本当に地球環境が悪化しているかどうかは分からない。「地球環境が悪化している」と「多くの科学者が考えている」だけで、それが事実かどうかはまた別の話なのだ。つまりソースタグの役割は、表象内容の情報（ここでは「地球環境が悪化している」）をそのまま信じるのを防ぎ、それが信用に値するかどうかが判明するまで「考慮中」の情報としてストックすることにある。

ではその「考慮中」としてストックされた情報はどうなるのだろうか。我々は自分自身で見聞きした様々な情報をもとにその情報の信頼度を測定することになる。その結果、もしその情報が信用に値しないことが分かれば、そのソースタグはずっとつけられたまま外されることはない。つまりその情報（ここでは「地球環境が悪化している」）はあくまで多くの科学者の意見にすぎず、事実とは限らないという処理がなされる。

では逆に、表象内容の情報が信用に値すると判明した場合はどうなるのだろうか。いろいろ自分で調べてみると、地球環境が悪化していると考える科学者の中にとても有名で有能な科学者が含まれていたり、あるいは自分がとても信頼しているジャーナリストが同じことを主張していたとしよう。どうやらその多くの科学者の意見は正しいようだと我々は考える。そうなると我々は、その情報がただ単に多くの科学者の意見ではなく普遍的な事実であると認めることになり、「多くの科学者は考えている」というソースタグを外すことになる。「多くの科学者は地球環境が悪化していると考えている」というメタ表象は、「地球環境は悪化している」という表象にとって代わられるわけである。

心理学では、「地球環境は悪化している」といった、具体的な経験とは結びつかない一般的記憶を「意味記憶」（“semantic memory”）と呼び、メタ表象に代表される、具体的な経験と結びついた記憶を「エピソード記憶」（“episodic memory”）と呼んでいる。エピソード記憶

には「時」、「場所」、あるいは「主体」を特定するソースタグが付いており、ある特定の時間、場所に、これは私に起こったのだという明確な意識を持って経験される出来事として記憶に刻み込まれる。しかしエピソード記憶と意味記憶は固定的なものとしてあり続けるわけではない。例えば、「太陽は地球の周りをまわっている」というのはかつては意味記憶であったが、現在は信用に値しないものとして「かつて人々はそう考えていた」というソースタグがつけられている。つまりこの二者の区別は便宜的なものであって、常にコンテクストに頼った流動的なものなのだ。

心の理論研究の第一人者であるサイモン・バロン＝コーエン（Simon Baron-Cohen）の『自閉症とマインド・ブラインドネス』（*Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*）によると、このような能力の進化が起こったのは、最小で２頭、最大で200頭ほどで生活していた霊長類がより優れた社会的知能を必要としたためらしい（Baron-Cohen 13–14）。「社会的知能」とは、他人の行動についての情報を処理し、それぞれの行動に対し適応的に反応する能力のことである。人間のような社会的動物にとって、他人の心情を推察しながら、同時にその推測に修正を加えることができるように、その推測のソースとしての我々自身の心を追い続けることはとても重要なことなのだ。

ザンシャインによると、小説の中では、実際に起こっていることを読者に分かりにくくさせるために、登場人物が表象のソースを摑むことに失敗するという描写が用いられている。例えば、ドストエフスキーの『罪と罰』に出てくるカテリーナ・イヴァーノヴナはメタ表象処理能力に欠けている典型的な人物で、「夫の年金をもらうことができればなあ」（“I wish I could get a pension for my husband”）という自分の気持ちを「私は夫の年金をもらうことができる」（“I can get a pension for my husband”）と思い違いしてしまう。つまりソースモニター（ソースタグを追い続けること）の能力に欠陥があるため、「できればなあ」（“I wish”）というソースタグの部分がすっかり抜け落ちてしまっているのだ（Zunshine 56–57）。

ザンシャインは『クラリッサ』（*Clarissa*）や『ロリータ』（*Lolita*）といった文学作品を例にとって、メタ表象処理能力に欠陥のある主人公の男性たちが、例えば「彼女が僕を愛してくれればいいのに」（“I wish she loved me”）といった自分の気持ちを「彼女は僕を愛している」（“She loves me”）と思い違いしてしまい、本気で相手の女性が自分を愛していると勘違いしてしまう例を挙げている。ここにはストーカー特有のメンタリティーを見ることができる。ストーカーはその性格に問題がある場合もあるだろうが、もしかすると多くの場合、メタ表象能力の欠陥が原因の可能性がある。

## II

『ライ麦畑』におけるホールデンの言動に首尾一貫したものを見出すのは難しい。彼は思春

期の若者にありがちなように相反する気持ちの間で板挟みになっている。彼の周囲の人々に対する意見にはしばしば矛盾が見られる。後で取り上げるサリー・ヘイズ（Sally Hayes）への感情などはその代表である。

しかしこの小説最大の矛盾とも言うべきものは、ライ麦畑で無垢な子供たちを捕えようとする「キャッチャー」という英雄と主人公ホールデンとの関係である。私が初めてこの小説を読んだ時に感じたことは、ホールデンは「キャッチャー」という英雄になりたいと言っているが、実は最も「キャッチャー」を求めているのは、大人の世界に踏み込むことを躊躇しているホールデン自身ではないのかということだった。そうなると、彼が「キャッチャー」になり、彼自身をキャッチしなければならなくなり、どう理解していいのか分からなくなる。

しかし読者はこれまでこういった矛盾にそれほど注意を払ってこなかったのではないだろうか。というのも、彼はまだ思春期の若者であり、こういう考えの矛盾やぶれは思春期の若者にありがちなものだからである。

私はメタ表象という考えを用いてこの問題を解決したいと考えている。結論から言えば、ホールデンはメタ表象処理能力に問題を抱えていると私は考えている。ソースタグを把握し続けるソースモニタリングに難を抱えているために、時々彼はソースタグを見失う傾向にあるのだ。それが彼にとって、他人とコミュニケーションを取る際に大きな問題となってしまっている。見失われたソースタグを取り戻すことさえできれば、彼が抱える矛盾が解消されるはずだ。

『ライ麦畑』の第15章でホールデンはサリーについて次のように語っている。

> I wasn't too crazy about her, but I'd known her for years. I used to think she was quite intelligent, in my stupidity. The reason I did was because she knew quite a lot about the theatre and plays and literature and all that stuff. If somebody knows quite a lot about those things, it takes you quite a while to find out whether they're really stupid or not. It took me *years* to find it out, in old Sally's case. I think I'd have found it out a lot sooner if we hadn't necked so damn much. (137-138)
>
> （サリー・ヘイズのことは）そんなに好きじゃないんだけど、ずいぶん前からの付き合いなんだ。僕は愚かにも前は彼女のことをかなり頭のいいコだと思っていた。なぜかっていうと、彼女は舞台や劇や文学やそういったことについてすごくたくさんのことを知っていたからなんだ。そういったことに詳しいやつがいたなら、そいつが本当はバカなのかどうかわかるまでずいぶん時間がかかるもんだよ。サリーの場合なんか、それが分かるまでかなり時間がかかったんだ。彼女とあんなにもいちゃいちゃしまくったりしてなければ、もっと早く分かったんだろうけどね。

第17章でホールデンはサリーとケンカをすることになるのだが、上の引用箇所に見られるよ

うに、ホールデンのサリーへの評価は、ルックスはいいが、頭はもう一つ良くないというもので、総じて否定的である。一人の人格としては、低い評価しか与えていない。なのに第17章でホールデンは本気で彼女と駆け落ちしようとする。サリーの性的魅力に屈してしまったと言えばそれまでだが、サリーに駆け落ちを申し出、断られ、喧嘩するという一連の出来事の直前と直後にサリーに対して徹底的に否定的な評価をすることを考えると、この豹変ぶりはいささかエキセントリックな感じがする。

駆け落ちをめぐるホールデンとサリーとのやり取りを見ると、サリーの言い分はほぼ100％正しい。ホールデンの計画は思いつきにすぎず、無謀で、非現実的なものである。まともな人間であれば、そんな無計画な自殺行為に近い駆け落ちの申し出を受けるわけがない。しかもホールデンは自分がこの世界に嫌気がさしているという理由だけで、サリーを誘うのであるが、サリーの方はこの世界に嫌気がさしているというそぶりなど少したりとも見せていないのである。

にもかかわらず、サリーから誘いを断られると、ホールデンは、初めからサリーとはウマが合わなかったとか、本当は心から彼女と行きたかったわけではないとか、男らしくない言い訳をする。

> I probably wouldn't've taken her even if she'd wanted to go with me. She wouldn't have been anybody to go with. The terrible part, though, is that I meant it when I asked her. That's the terrible part. I swear to God I'm a madman.（174）
> もしかりに彼女が僕と一緒に行きたいって言ったとしても、僕はたぶん連れて行かなかったろうね。あのコだけは連れて行こうとは思わなかったろうな。でも何がひどいかっていうと、彼女を誘ったときは本気で連れて行きたいって思ってたんだ。本当にひどい話だよ。間違いなく僕は頭がおかしいんだよ。

さて、ここで考えてみたいことは、ホールデンの本音はどちらなのかということだ。サリーは彼が必要としている人物なのかどうか。もっと言えば、サリーを本当は連れて行きたかったのかどうなのか。上の引用では、どちらもが彼の本音であるかのような印象を受ける。でもそれは明らかな矛盾だ。連れて行きたくて、でも同時に連れて行きたくないなんて、確かにホールデンの言うように正気の沙汰ではない。

そこでメタ表象の観点からこう考えてみてはどうだろう。普段ホールデンはサリーが自分の求めるような女性ではないと分かっている。でもサリーと会い続けるのは、もしかすると今までとは変わって、サリーが自分の求める女性に変わっているかもしれない、あるいは今までの自分の評価が間違っていたのかもしれないという仄かな期待があるからである。つまり彼はこう考えている、「彼女は僕が求めているもの全てを持っていると僕は望んでいる（信じてい

る）」（“I hope (believe) that Sally has everything I need”）。しかし彼にはメタ表象処理能力にいささか問題がある。気がつくと「僕は望んでいる（信じている）」（“I hope (believe)”）というソースタグが外れてしまっているのだ。そして「サリーは僕が求めている全てを持っている」（“Sally has everything I need”）という表象だけが残る。それで彼は本気でサリーが自分の求める女性であると思い込んでしまう。

おそらく彼女を誘った時、彼は本気でサリーが理想の女性だと思っているのだ。しかしサリーに断られ、喧嘩し、「サリーは僕が求めている全てを持っている」（“Sally has everything I need”）という表象は真実ではないことに気づかされ、この意味記憶はエピソード記憶として収容されるべくメタ表象化される。つまり「僕は望んでいる（信じている）」（“I hope (believe)”）というタグが復活することになる。サリーが理想の女性だというのは結局自分の希望にすぎなかったのだと気づかされるわけである。

『ライ麦畑』を読むと、こういったプロセスが繰り返されていることに気づかされる。まず最初にホールデンは何かに対して、こうあってほしいという自分勝手な思い込みを抱く。そしてそのうちにその思い込みの部分のタグ、「僕は望んでいる（信じている）」（“I hope (believe)”）の部分が外れてしまい、それが自分の期待ではなく、彼にとっては現実のありようになってしまう。エピソード記憶が意味記憶化されてしまうのである。それは彼がソースタグを追い続ける能力に欠陥をもっているためなのだ。

そして自分のいいように現実を作りかえたホールデンは、自分の考える真実と現実世界との違いに苦しまなければならなくなる。サリーは自分の理想の女性であるはずだった。そう信じていたからこそ駆け落ちの申し出をした。なのに彼女はそれを断った。ホールデンは心を痛めるが、実はそもそもサリーが自分の理想の女性だったのは自分の頭の中でだけだったのだ。サリーに断られて初めてホールデンはそのことに気づかされる。そして「サリーは僕が求めている全てを持っている」（“Sally has everything I need”）という表象に「僕は望んでいる（信じている）」（“I hope (believe)”）というタグが復活し、再度メタ表象化される。こうしてようやくホールデンは正しい現実認識に戻ることができるのである。

## III

かつて心理学者のＣ・Ｇ・ユングは「正しい現実認識には常に救いの効果がある」と言ったことがあるが、私は『ライ麦畑』に描かれている、ホールデンにとって救いとなったものは正しい現実認識であると考えている。彼は自分の願望が現実にとって代わってしまった世界、つまりソースタグが外されてしまった表象の世界に再びソースタグを取り戻し、メタ表象化することにより、自分の願望とありのままの現実を区別できるようになるのだが、この自他分離とも言える認識が、彼が抱えていた様々な問題に光を投げかけたのだと私は考えている。

この作品のエンディングにはどこか釈然としないところがある。というのも、このエンディングでは、これら全ての物語をホールデンがどうやら精神分析医に話しているらしいことになっているからだ。それを重視すると、やはりホールデンは問題を解決できなくて精神的に病んでしまったのではないかと考えることもできる。ただ、妹フィービーがメリーゴーランドに乗っているのを雨の中ずぶ濡れになりながらホールデンが見守るシーンは、ある種の前向きなカタルシスを感じさせるし、この雨は様々な問題が洗い流されていくイメージを表したものだと考えるのは妥当だと思う。

ではいったい何が救いとなったのかというと、やはり先ほども述べたように、ソースタグの復活による表象のメタ表象化だと私は考えるのである。ではホールデンが、それまで真実だと思っていたことに修正を加え、ソースタグを復活させ、メタ表象化していくプロセスをもう少し見てみよう。

ホールデンが自らを取り巻く様々な問題に修正を加えソースタグを取り戻す上で、決定的な働きをした二つの出来事が “fuck you” の落書きとフィービーの反抗である。

ホールデンは、ニューヨークを離れ、一人で西部に向かうという無謀な計画を立てる。そしてそのことを知らせようと、フィービーに会うために彼女の学校まで行く。すると廊下の壁に “fuck you” という卑猥な落書きを見つける。子供たちを無垢な世界にとどめておく英雄「キャッチャー」としてのホールデンは心を痛め、その落書きを消す。しばらく歩くと、また同じく “fuck you” の落書きを見つけるが、今度はナイフで彫りこまれていて、消すことができなかった。この場面は、ホールデンが「キャッチャー」になることができないことを悟る上で大きな役割を果たすのだが、メタ表象の観点からは次のように説明することができる。

そもそもホールデンは「子供たちがライ麦畑の中で守られることが可能だと僕は願っている（信じている）」（“I hope (believe) that children can be protected in the rye”）と考えていたはずだ。だから彼は「キャッチャー」になろうとしたわけである。しかしソースモニター能力の欠如のために、このメタ表象からソースタグが外れてしまう。「子供たちが無垢な世界の中に保護されることは可能だ」と思い込んでしまったホールデンの前にあの “fuck you” の落書きが現れたわけである。その決して消すことのできない彫られた落書きは「子供たちがいつまでも無垢な世界の中に保護されることは不可能だ」ということを示している。そうなると相矛盾するこの二つの表象を目の前にして、目の前の厳然たる事実を優先し、「子供たちは無垢な世界の中で守られることが可能だ」（“Children can be protected in the innocent world”）という表象に「僕は願っている（信じている）」（“I hope (believe)”）というタグを戻さざるを得なくなってしまうわけである。これによりもともとの正しい認識に戻ったことになる。

次に、もう一つの大切なフィービーとの関係をメタ表象の観点から見てみよう。フィービーはホールデンがもっとも信頼している人物である。彼女はホールデンに対して最も深い愛情を

見せ、ホールデンもまた彼女に対して誰よりも深い愛情で接している。この極めて従順な妹フィービーに対してホールデンは完全に理想的な妹像を投影していた。自分の言うことは何でも聞いてくれ、自分の言うとおりにしてくれる妹という妹像である。

しかしそのフィービーがホールデンに反抗するシーンがエンディング付近で描かれる。一人で西部に行くと言うホールデンにフィービーはついて行こうとする。だがホールデンは、これが無謀な逃避行であることが分かっているので、フィービーを連れて行くわけにはいかない。それで、まだ授業が終わっていないフィービーに対して学校に戻れと言う。だがフィービーも引き下がるわけにはいかない。そのままホールデンを見送ってしまうと、彼が破滅に向かっていくことが賢明な彼女には分かっているからだ。そこで彼女は極めて強い態度でホールデンに反抗する。

> “I said I’m not going back to school. You can do what you want to do, but I’m not going back to school,” she said. “So shut up.” It was the first time she ever told me to shut up. It sounded terrible. God, it sounded terrible. It sounded worse than swearing.（269）
>
> 「言ったでしょ、学校には戻らないって。兄さんは好きにすればいいのよ。でも私は学校には戻らない」と彼女は言った。「だから黙って」。彼女が僕に黙ってなんてことを言ったのはその時が初めてだった。ひどい響きだった。まったくひどかったな。汚い言葉を浴びせられるよりもひどく聞こえたね。

ここでフィービーはそれまで見せなかった顔を見せている。それによりホールデンは今まで信じ続けてきたフィービー像の再評価、再構築を余儀なくされる。反抗することもなく従順でおとなしい妹という評価に疑問が呈され、「僕は願っている（信じている）」（“I hope (believe)”）というタグが復活することになる。つまり今まで自分が思い込んでいたフィービーという人物は、現実のフィービーとは異なるということに気づくわけである。

ここで、この小説最大の問題、ホールデンは「ライ麦畑の捕え人」なのか、それとも無垢な世界を象徴する「ライ麦畑」に捕えられているのか、という問題を取り上げたい。

（1）Holden is the catcher in the rye.（ホールデンはライ麦畑の捕え人である）
（2）Holden is caught in the rye.（ホールデンはライ麦畑に捕えられている）

先ほども言ったように、この二つは一見相反するもののように見える。捕えられている人間が、同時に捕える人間になることなど不可能だからだ。

しかし少し考えると分かるのだが、(1)は現在の事実ではなく、将来ホールデンがそうなり

たいと願う理想の姿にすぎない。一方、(2)はホールデンが今現在感じていることであり、現実のありように近いものと言ってよい。この二つにそれぞれ適切なソースタグをつけると次のようになる。

(1) Holden wishes that he were the catcher in the rye.（ホールデンは自分がライ麦畑の捕え人になりたいと願っている）
(2) Holden feels that he is caught in the rye.（ホールデンは自分がライ麦畑に捕えられていると感じている）

この二つのメタ表象を見てもらえると、この二者が必ずしも相矛盾するものではないということが分かってもらえると思う。ホールデンが、自分が無垢な世界に捕えられていると感じていることと、同じくホールデンが子供たちを無垢な世界にとどめておきたいと望むことは相矛盾しない。一見矛盾するように見えたのは、本来あるべきソースタグが外れていたからである。あるべきソースタグがつけられて初めて我々は正しい現実認識に至ることができるのだ。

## 結び

以前、私は『ライ麦畑』は無垢な世界に捕えられていた少年が、いつまでも親の庇護のもとにいることは間違いだと気づき、その無垢な世界から飛び出すことを決意する物語だと考えていた。作品のエンディングで、メリーゴーランドから落ちそうになっているフィービーを見ながら彼が持つにいたる「落ちる時は落ちるんだ、でも何かを言ったりするのはよくないんだ（“If they fall, they fall off, but it’s bad if you say anything to them”）」(274)というそれまでとは全く違う認識にそのことがよく表れている。今でもその考えは正しいと思っているが、メタ表象の観点から見ると、彼がそう認識を変えたプロセスを明らかにすることができる。

それまでずっと持ち続けてきた「子供たちは無垢な状態の中に守られ続けるべきだ」という考えから、「（ライ麦畑という無垢な世界から）落ちる時は落ちるんだ」という認識への変化には、数度にわたるホールデンの自己認識の変化が関わっていると考えることができる。サリー、ジェーン、アントリーニ、“fuck you”の落書き、フィービー、彼らと接するうちにホールデンは、実はメタ表象のソースタグを外してしまうことによって、自分の願望を事実と取り違えてしまうという過ちを犯してしまっていたことに気づいたのだ。

「僕は願っている（信じている）」（“I hope (believe)”）というソースタグがついた表象内容が信用のおけないものであるということに気づいたホールデンは、自分の信念に疑いを持ち始める。サリーも、ジェーンも、フィービーも、実際の彼女たち自身は自分が思い込んでいた彼女たちの姿と違っていたし、壁の卑猥な落書きだって消せやしなかった。どうやら自分で思

い描いていたこの世界は、現実のこの世界の姿とは違うようだ。自分が「キャッチャー」となって、子供たちを、そして自分自身をも永遠に無垢な世界の中に捕えておくなんて考えも間違っているのかもしれない。そのようにホールデンは考えたのではないだろうか。

かつて私は、自分にはできないことがあることを認識すること（ホールデンの場合は「キャッチャー」にはなれないということ）が、大人へと成熟する上で大切なものになったのだと考えていたのだが、自分という情報ソースに疑いを持ち始めることも同じくらい大切なことなのかもしれない。「落ちる時は落ちるんだ」という認識へと認識を変えるホールデンのように、我々も自分というソースにある程度疑いを持つべきなのだろう。

ホールデンは他人とのコミュニケーションでなぜあんなにも苦労するのだろう。おそらくそれは彼のメタ表象処理能力の欠陥によるものなのだ。自分の願望や気持ちを現実のものと取り違えてしまうという誤りから来るものなのだ。そしてその誤りは、誤ってソースタグが外されてしまった表象に再びソースタグを取り戻し、再度その表象をメタ表象化させることによって是正される。そう考えると、『ライ麦畑』はソースタグを取り戻す物語でもあると言えるのかもしれない。

〔引用文献〕

Baron-Cohen, S., Leslie, A. M., and Frith, U. “Does the Autistic Child Have a “Theory of Mind”? *Cognition*, 21(1985): 37-46.

Baron-Cohen, Simon. *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. Cambridge: The MIT Press, 1995.

Leslie, A. M. and Roth, D. “What Autism Teaches Us About Metarepresentation” *Understanding Other Minds: Perspectives from Autism* (ed. S. Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg, and D. J. Cohen). Oxford: Oxford University Press, 1993. 83-111.

Premack, David, and Woodruff, Guy. “Does the Chimpanzee Have a ‘Theory of Mind?’” *Behavioral and Brain Sciences*, 4(1978): 515-526.

Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*. Boston: Little Brown, 1951.

Zunshine, Lisa. *Why We Read Fiction: Theory of Mind and the Novel*. Columbus: The Ohio State University Press, 2006.

（もちどめ　こうじ　英米学科）

2010年10月12日受理